

「文化」の現場を歩く

第3回

人材・施設・手法

静岡文化芸術大学教授
松本 茂章

静岡県熱海市の 元旅館「起雲閣」

◆熱海「三大別荘」の一つ

近年、静岡県熱海市の観光がV字回復している。2015年度の宿泊客数（入湯税ベース）は308万人に達し、14年ぶりに大台に乗った。2011年の236万人を最低に上昇傾向にある。人気復活の理由はいくつも挙げられる。景気低迷のなか近場の観光が再評価されたこと、映画やテレビでよく取り上げられるようになったこと、おしゃれな飲食店が増えたこと、昭和レトロのまちなみが注

結婚後に熱海に移り住んだ。「夫は銀行員。専業主婦で社会活動はPTAぐらい。そんな私が、市長の諮問団体・あたま女性21会議の代表を拝命して、まちの活性化を真剣に考えるようになりまして」と振り返る。同会議が提言したのは主に四



NHK連続テレビ小説「花子とアン」の撮影も行われた起雲閣

目されていること。その一つに元別荘でかつての高級旅館「起雲閣」が一般開放されて、「名所」ができた点も指摘される。訪れた7月9日の土曜は生憎の雨模様。JR熱海駅から徒歩20分に位置するが、雨脚が激しくてバスに乗って訪れた。尾崎紅葉作『金色夜叉』のお宮・寛一像が置かれたサンビーチ沿いを西に走ってから到着した。木造の表門付近には朝顔の紫色の花が鮮やかに咲いていた。

起雲閣の敷地は9172平方メートル。設けられているのは9棟1門で延べ3503平方メートル。1919（大正8）年に「海運王」といわれる内田信也（1880-1971）が母の療養先として和館2棟を建てた。東武電鉄を興した「鉄道王」の根津嘉一郎（1860-1940）が1925（大正14）年に購入し、1929（昭和4）年と1932（昭和7）年に洋館各1棟を建てた。戦前の熱海には三大別荘があった。旧根津邸のほか、非公開の岩崎別荘、今はなき住友別荘の三つである。このうち今も公開されているのは旧根津邸だけで希少価値がある。なぜ起雲閣と呼ばれるのか？ 戦後

つ。一つに男女共同参画社会の実現、二つに起雲閣の保存、三つに丹那トンネルの湧水の商品化、四つに市内の特産品・橙（ダイダイ）を活用したマーマレードづくり、である。なかでも起雲閣の保存問題に本腰を入れた。

「売却後マンションに建て替えられる恐れがあった。講演会を開いて歴史を勉強した。旅館の女中頭さんが新潟県長岡市にご健在と聞き、自己負担で聞き取り調査に向いた。次第に価値が分かり始め、『絶対に残さなきゃ駄目』と決意した」

◆文人たちが泊まった 歴史

副館長の千葉は熱海生まれ。「高級旅館なので名前は知っていたけれど、壁の周囲に木々が生い茂り、中が見えなかった。議員視察に同行して内部を見た

直後の1947年、石川県で大きな旅館を経営していた櫻井兵五郎（1880-1951）が購入して高級旅館に改装した。しかし旅館は1999年に廃業。土地建物が競売物件になったものの、買い手がつかなかった。そこで熱海市長の諮問団体・あたま女性21会議が「市で買って貴重な文化財を残そう」との運動を始めた。女性たちの熱意に押される形で、同市は2000年、12億円で買い求めた。現在は市の登録文化財となり、大人510円で見学できる。音楽会や美術展などの貸会場としても使われている。

◆市民による管理運営

「またお越しくださいねっ」。女性2人が、見学を終えた入館者たちに笑顔で声を掛けていた。黒い上着に白いスカート姿の館長・中島美江（1947年生まれ）と白ワンピースに大きな玉のネックレスをつけた副館長・千葉むつみ（1956年生まれ）だ。女性ばかりのNPO法人あたまオアシス21（会員27人）が市から指定管理者に選定されている。同理事長も務める中島は横浜育ちで

瞬間、豪華さに息を呑んだ」と振り返る。洋館は仏アールデコや英チューダー様式を用いた造りで、天井に華麗な装飾が施されている。ローマ風呂室も設けられた。欧州貴族の館と見間違えうばかりだ。和館の造りも丁寧で、「孔雀の間」では舟橋聖一が執筆のため泊まり込み、「大鳳の間」には太宰治が玉川上水で情死する3カ月前に女性と宿泊した。山本有三、志賀直哉、谷崎潤一郎、武田泰淳など日本を代表する作家に愛された。2000年11月28日から一般公開するとともに、改装して音楽サロンと美術ギャラリーを備え、市民の集う文化施設に衣替えした。

オアシス21が指定管理者に選定されているのは2012年度から（一部の時期を除く）。その後利用者数は上昇傾向にある。市直営時代、年間入場者9万人前後だった有料入館者が、2015年度は12万人を超えた。入館料収入、喫茶売上、貸館使用料も右肩上がりになった。市生涯学習課の文化施設室長、小林啓一

女性NPO法人の「おもひなつ」

(1968年生まれ)は笑みを浮かべながら「オアシスのみなさんの努力には本当に頭が下がる。丁寧な掃除、庭や花の手入れなど女性目線のおもてなしが行き届いている。入館者から感謝の気持ちを記した手紙もいただくようになった」と評価する。喫茶では、オアシス21が商品化した橙のマーレード入り紅茶がおいしいと好評だ。指定管理者制度のうち、同市が日々の収入を受け取る料金収受代行制が採用されている。収入額が当初目標を上回った場合、経営努力を認めて一定額をオアシス側に戻す契約だ。2015年度には市が約288万円をオアシス21に支払った。それだけ女性たちが頑張ったわけだ。

◆文人墨客ゆかりの熱海

筆者が訪れた際、20代前後の若い女性たちが多く見かけられた。広い庭を散策するとほっとするらしい。春は梅や桜、夏はアジサイなど季節感がある。有難いことだが、千葉は「これ以上入館者が増えると、建物や庭園をゆっくりと歩いて楽しんでいただくには混雑し過ぎる恐れ

もある」と懸念した。入館者急増対策が急務となってきた。市側の小林は「見学できるスペースを増やしたい。文人を紹介する場所は旅館時代の和館1階だけが、公開していない同2階にも著名作家を紹介する部屋を設けるなど、熱海にゆかりのある文化人をもっと顕彰できれば……」。熱海には作家や文化人ゆかりの施設が多く、これらを紹介するセンター機能を持たせる必要がある」と意気込む。

小林の言葉通り、熱海には文学者、美術家、音楽家らが多く暮らした。文人たちの別荘等が立ち並んでいたからだ。小林ら4人の市職員が勤務する文化施設室の管理するところは起雲閣を含めて10施設ある。▽澤田政廣記念美術館(文化勲章受章彫刻家の作品等)▽伊豆山郷土資料館(伊豆山神社や郷土の宝物)▽旧日向別邸(ブルーノ・タウト設計の地下室)▽池田満寿夫・佐藤陽子創作の家(2人の旧居)▽池田満寿夫記念館(元工房)▽中山晋平記念館(作曲家の旧宅)▽凌寒荘(歌人・佐佐木信綱の旧邸)▽彩苑(作家杉本苑子の旧邸)▽双柿舎(坪内逍遙の旧邸)である。このうち市の所有

施設が8カ所だ。このなかで指定管理者を選定して民間活力で運営する事例は起雲閣だけだ。施設の多くは親族や関係者からの寄贈を受けて市が直営で保存と顕彰活動を続けている。とはいえ、小林によると、亡くなったあとの文化人ゆかりの場所はどうしても話題にのぼりにくく、集客しにくい面がある。経費もかかるなどの課題が山積する。だからこそ、起雲閣で展開されている市民主導による文化施設運営はモデルケースとして大きな意義があるのだ。

中島らは毎日午前7時30分に出勤して玄関などに水を打つ。そんな話を聞いているうちに興味深いことに気付いた。中島や千葉は旅館業界の出身ではないけれど、親しい友人や学校の友達に旅館関係者が身近にいた。小林は祖父が旅館の板長、父もかつて旅館で調理師を務めていた。「小中学校のクラス仲間が40人余りだった時代に級友10人ほどの保護者は旅館やホテル、保養所に勤めていた(小林)。このように熱海市民には「おもてなし」のDNAが脈々と受け継がれているようだった。(敬称略)